

4) 腸管結節性リンパ過形成を伴う common variable immunodeficiency disease (Hermans 症候群) の1例

伊藤 聡・長尾政之助 (新潟大学第二内科)
林 直樹・荒川 正昭 (新潟大学第二内科)
三間 孝 (新潟医療短大)

患者は37才男性。昭和60年、反復する上気道感染を主訴として某院を受診。低 γ グロブリン血症を認め当科に紹介された。理学的所見では扁桃腫大、脾腫、表在リンパ節腫張、湿疹を認められ、IgG、IgM、IgA の著明な低下を認めたが、補体欠損はなかった。末梢血リンパ球サブセット、B1/B2 比正常。リンパ球芽球化反応、IL2 産生能低下。健常人とのT、B細胞混合培養にて、Th の機能低下と Ts の機能亢進が疑われた。骨髓に形質細胞を認めず無胃酸症、萎縮性胃炎、ランブル鞭毛虫感染があり、小腸にリンパ濾胞の過形成を認めた。本例は1966年 Hermans らが報告した症候群に相当するものと思われる。

5) 佐渡地方で経験した CD 4 陽性 IBL like T-lymphoma の1例

青木 定夫・漆山 勝 (佐渡総合病院内科)
岩田 文英・瀬川 宗助 (佐渡総合病院内科)
丸山 聡一・永井 孝一 (新潟大学第一内科)
品田 章二・柴田 昭 (新潟大学第一内科)
福田 剛明 (新潟大学第二病理)

症例は72歳女性で相川町の出身。1986年6月全身リンパ節腫張、胸水にて某院より紹介され当院入院。頸部、腋窩、鼠頸部に最大径3cmのリンパ節を多数触知。全身CT検査では、胸腹部のリンパ節腫大と胸水、腹水、肝脾腫を認めた。検査成績ではLDHの高値を認めたが、骨髓浸潤はなかった。抗ATLA抗体陰性。腋窩リンパ節の生検にてIBL like T-lymphoma の診断。FCMによるmarkerの検索では、CD3+CD4+CD8-であった。CHVP療法にて1カ月にて寛解に導入できた。IBLとその類縁疾患の分類は現在混乱しており、nonATLでCD4陽性の本症例の存在は興味深かった。

6) セザリー症候群患者末梢血 OKT 4⁺ 細胞の免疫学的解析

山口 茂光・松村 剛一 (新潟大学皮膚科)
佐藤 良夫 (新潟大学皮膚科)

症例：74歳、女。村上市出身。昭和60年、全身紅斑、リンパ節腫張、発熱が出現した。WBC 27,500 (atypical lymphocytes 67.5%, CD3 98.1%, CD4 93.8% IL-2R 陽性細胞0.9%)。ATLA 抗体 (-)。電顕では脳回転状の核を有す

るリンパ球であった。患者CD4⁺細胞は自己及び正常non-T細胞のIgG産生を誘導したが、正常リンパ球のIgG産生は抑制しなかった。また、このCD4⁺細胞はIL-2やmitogenの添加でIL-2Rの発現及び増殖を起こすが、正常CD4⁺細胞より低値であった。このCD4⁺細胞からのIL-2産生は少なかった。患者CD4⁺細胞は機能的にもhelper T細胞であり、また、その増殖にはIL-2とIL-2Rのinteractionの異常は関与しないことが推測された。

7) Lymphosarcoma cell leukemia の1例

水戸 将郎・渡部 透 (新潟南病院内科)
永井 孝一 (新潟大学第一内科)
漆山 勝 (佐渡総合病院内科)

我々は、chronic lymphosarcoma cell leukemia の一例を経験したので報告した。症例は71才男性、浮腫と腹部膨満感で発症し、著明な脾腫と貧血および病的細胞を含む白血球増多よりALLを疑われ当科転科となる。末梢血中に65%、骨髓中に59%の病的細胞(N/C比大で明らかな核小体を有し核網はfine)を認めその形態的特徴よりchronic lymphosarcoma cell leukemia と診断した。表面マーカーの検索では、骨髓、リンパ節ともB cell type (IgG, k) であった。当初DNR, VCR, PRD, にて加療し病的細胞の減少を認めたが、再度増加傾向を示したためADR, END, VLB, に変更し一時肺炎の合併を認めたが、上記3クールに加療にて、病的細胞消失し、現在外来にて、END, VBL, PRD, による1/Mの治療を続けている。今回我々が経験した症例は、細胞形態および臨床経過よりchronic lymphosarcoma cell leukemia と診断したが、今後表面マーカーの検索等の進歩により、その病態がより明らかになると考える。

8) 当院における B-cell malignancies の免疫細胞学的並びに臨床的検討

桜井 友子・水野 祐子 (県立がんセンター)
中川 利子 (新潟病院中検血液)
佐藤 正之・村川 英三 (同 内科)
橋本 謹也・浅見 恵子 (同 小児科)
内海 治郎

昭和58.5~61.12の間に当院で検索したlymphoid malignancy は133例で、T28例、B73例、nonT nonB 19例、判定不能13例であった。うちnonT nonB 19例とB73例(骨髓腫を除く)について検討を行った。病型別ではALL 33例、CLL 6例、PLL 1例、PCL 3例、